

人間 バンザイ

北欧、エジプト自転車の旅
で学んだ「世界は一つ」



ヨーロッパ最北端のノール岬。自転車で来た
ことに、みんなびっくり（ノルウェー）

どの土地にも匂いが

中村君のデツカイ旅行記

文・写真

経済学部3年

中村 岳彦

中大に入学した97年4月、探検部に興味を持っていた僕は、自然と部の説明会場に足が向いていた。が、実はその横で新人を勧誘していたサイクリング同好会の説明をちよつと聞いてみようと立ち寄ったことが、僕の大学生活を決めてしまった。

手始めに日本一周

高校時代から憧れていた「自転車による海外旅行」が目的だったが、何事にも、ものには順序がある。まず日本1周に挑戦した。地元・相模原から南下、南端の沖縄へ行つてから、今度は北上して北海道へ。そこから相模原に戻る単純なルートだった。とはいえ、8500^{キロ}の自転車の旅は容易ではなかった。毎日、腹一杯食べていても、体重はみるみる減っていくのが実感できるのだ。

60日間の緊張から解放された瞬間、こみ上げる達成感で思わず泣けてきた。この日本1周で、心身に大いに自信がついたことはいまでもな

「自転車通行危い」……戦車で護送



- ① ノルウェールの港町スボルバー。夜10時でも明るい。目の前はグリーンピースの船
- ② 最終ゴールのイヴァロ空港（フィンランド）。感動のあまり自転車ごと“侵入”した

い。旅のだいご味も知った。どの土地にも「匂い」があった。満を持して翌98年夏、ついに海外へ飛び出すことを決意した。デンマークの首都・コペンハーゲンからヨーロッパ最北端のノール岬を目指すスカンジナビア半島走行を試みた。この旅は、地形的に全体に標高差が激しく、特にノール岬へ向かう最終

ルートの上下坂が連続する苦しさは忘れられない。息苦しく、足も痛かったが、「そこにゴールがある」と思っただけで、心の中に燃えてくる熱いものを感じた。

ノール岬に着いたとき、感激に目がうるうるしていた。そして、神からの素敵なプレゼントだったのか。その夜、季節外れのオーロラを拝むことができた。

しかし、いいことばかりではない。現地を走行中、思わぬ苦い経験をさせられた。それはリングゴの芯や空き缶、つまり、ゴミを投げつけられた

「うちで寝る」

そして99年初春、マイチャリをエジプトに持ち込んだ。カイロからアスワンまで1000^キを南下するのが目的だ。カイロ空港では、またとない快晴が僕を迎えてくれ、さっそく自転車の組み立てを始めた。物珍しげに集まった10数人のエジプト人に囲まれての作業となり、決し

ことだった。最初はわけがわからずただ苛立つただけだったが、あとで現地の人から聞いてわかったことは、「戦前、ノルウェー、スウェーデンを侵略したドイツと同盟を結んでいたのが日本だったから」という理由だった。

残念ながら、それはどうすることもできない事実であり、認めるべき歴史の事実である。僕は、そのようなことがあったことを忘れてはいけないと、自分にしっかりと言い聞かせたことを、いまでもはっきり覚えている。

村人の歓待

て快適な作業ではなかった。アラビア語や英語などで「これが欲しい」といいながら道具に触れてくる。「触れるな！」とだけいって作業に専念したが、なにか、緊張の23日間が予想させられた感じだった。

2月13日、ギザのピラミッド敷地内に入ろうとすると、警官に「自転車を置いてくるよう」に注意される。僕は自転車を手離したくなかったので、ポリス本部へ頼み込んで許可を

もらった。僕は古代文明の遺跡を眺めながら、米を炊いてラーメンを食べた。うまい！

この日はベニ・スエフまで行かねばならなかった。なぜなら「テント宿泊はだめ」で、ポリス機関があげる11都市のいずれかに宿泊し、「午後5時半までに現地に着くように」

いわれていたからだ。僕はこれを守る自信はなかったが、「数日前に銃撃戦があつたばかり」という話をされたのが気になった。

案の定、ピラミッドの前でのんびりしたせいか、午後6時を過ぎてても両足はまだペダルの上だった。僕が選んだベニ・スエフの街までは、まだ50^{キロ}もある。「これはテントで休むしかない」と思い、コースから外れてみた。パン売りがそこにいた。ナイル側を眺めながら、お世辞にも決してうまいとはいえないパンをかじっていると、村人たちが物珍しげに集まってきた。

ことは3人の子に、ドロップ船をあげたことから始まった。すると、どこからともなくゾロゾロ出てきた。袋ごと船をあげても、とても足りない。僕は「もうない」のジェスチャー



をして、そのまま横になった。しかし、村人の数はドンドン増え、とても寝るところではない。すると彼らのなかにジェスチャーで「うちで寝ないか」という者がいたので、素直に従った。

お世話になると決まったら、さっそく村人たちがシャイ（紅茶）をこ馳走してくれた。連れていかれた家は、レンガで作った粗末な造りだったが、「僕に最高のもてなしをしてくれているんだな」ということがわかった。食事は例のガリガリのパンとメチャメチャ柔らかいチーズ、それに、固い乾燥肉（ヒツジ？）とポテトチップスだった。

明らかに僕に関するおしゃべりをしてる村人に囲まれ、「特等席」に座らされた僕は「食中毒にならないか、下痢でもないか」など、ピ

女王のピラミッド内で、カメラにおさまる筆者(左)と女王ミイラが埋まっていたところにも入ってみた



クビクしていたが、顔だけは笑顔をつくらなければならなかった。時間がたつに従い、村人が挨拶に回ってくる。寝るまでに50人ぐらいの村人と握手をしただろうか。

翌朝、見送りに出て来た彼らは「また来いよ」といつまでも手を振ってくれた。

2月15日、町を出て3時間ほど

走ったところで検問に会う。最高の笑顔で「僕は悪い人間じゃない」ことを懸命にアピール。アラビア語で「アッサラーム」と挨拶しながら、爽快に走り抜けた……と思ったら、甘かった。自転車の荷物すべてをチエックされた。バーナーや工具の説明が大変で、その場で使っで見せたりした。検問の係官は納得したようなので、通行許可をもらおうとしたら「ダメ!」。自転車での移動は危険だ。反政府ゲリラが銃撃戦を仕掛けてくる」というのだ。

僕が「カイロのポリスは許可している」とハツタリをきかすと、上官らしき警官が通行許可を出してくれた。しかし、「護衛付き」という条件だった。「自転車で行って、護衛付きも悪くない」と思い、即座にOKを出し、いざ出発。

30分も走ったとき、警官は、どうしても自転車の旅が理解できないのか、「車に自転車載せる!」と叫ぶ。銃を持った彼らに従った。車での移動はアツという間だったが一瞬、「ここまで、なんのためにやって来たのか」と思ったら、自分のやっていることがバカバカしくなってきた。次



3年前、乱射殺人事件があったハトシェプスト葬祭殿。観光客の足は未だに戻らないと業者はぼやいていた



の検問所で護衛も交代。その間に自転車も新たな車に積み替えられた。これが数回続いたが、ある検問所では自転車を積み込む車がなく、仕方なく「走ってよし」ということになった。久しぶりに一人になった解放感にひたり、ベダルも軽く走っていると、後方からガラガラと轟音を立てて戦車がやってきた。

僕の前で止まり「自転車を中に入れて」という。いやあ、思わぬところで「戦車に便乗」しちゃった……。この護衛付き移動は、2月17日のアシュートまで続いたが、さらに南のルクソールまでは列車で移動することになり、ようやく護衛を振り

寅さんぶり // お祭の出店 //

ところで、皆さんは私の記事を読んで、「いったい、費用をどう工面しているのかな」と思われませんか。私の「資金捻出法」は――。

行以外の他のことに、ほとんど目がいかないことが欠点ですが、逆に、ここまで一生懸命になれたこと自体が幸せと思っています。

現在は土・日・祝日は朝から13時間労働で、そうでない日も学校帰りに働いています。週4～5日のペースでしょうか。さらに、地元のお祭りに、かき氷、チョコバナナの出店を2か月に一度ぐらいのペースで出します。かき氷は、削り機(約7万円)まで買い揃えました。そんな資金稼ぎのなかで、やりがいのあるのは出店でした。確実性には欠けませんが、ギャンブルっぽい点が魅力です。もし、お祭りでもありましたら、お呼びくだされば幸いです。

このような大学生活は、自転車旅

自転車旅行に限らず、旅は心を豊かにしてくれます。私はこれまでの旅を通して「旅の思い出となる主役は人間」であることを学びました。そんな関わりを求めて、今年の夏には、中央アジアを自転車で大いに走ってみたいと思って、寸暇を惜しんで、アルバイトのに精出していきます。(裏表紙に写真グラフィック)

なお、6月10日(木)、11日(金)の両日、図書館下のホールで、僕と旅を共にした自転車など「旅の友」の数々を展示し写真展も開きます。